「ひとと原発~失われたふるさと~」上映対談会

対談テーマ：「ひとにとって真の復興とは」

1. 開催日時：2021 年 8 月 8 日（日）
2. 拠点会場：労働者協同組合連合会会議室
3. 主催：一般社団法人シニア社会学会
   共催：早稲田大学 地域社会と危機管理研究所
   早稲田大学 総合人文科学研究センター＜現代の危機と共生社会＞研究部門
4. 登壇者
   ◆板倉真琴（脚本家・映画監督）
   ◆原田雄一（浪江町住民・NPO 新町なみえ代表・元浪江町商工会会長）
   ◆伊藤まり（浪江町住民・NPO 法人 WE21 ジャパン青葉代表）

5. コメンテーター
   ◆野坂 真 （早稲田大学講師（任期付））
   ◆松村 治 （早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員）

6. 総合司会
   ◆長田攻一（一般社団法人シニア社会学会事務局長、災害と地域社会研究会座長）

参加者：32 名

長田：本日は、板倉真琴監督が撮影された「ひとと原発~失われたふるさと~」の上映対談会に、多くの方にご参加いただき、まことにありがとうございます。
まず、開催にあたりまして、一般社団法人シニア社会学会の袖井孝子会長よりご挨拶をいただきます。

袖井： 一般社団法人シニア社会学会会長の袖井でございます。本日は台風 10 号がやってきて大変な状況になってしまって、自宅でご参加の方はまだよいのですが登壇者の方は会場まで足を運んでいただいて本当にありがとうございます。本日はオリンピックの最終日であり、閉会式ですね。皆さんもご記憶に新しいと思いますが、このオリンピックは「復興五輪」と呼んでいたのですが、いつの間にかテーマが「多様性と協調」となってしまい、「復興」がどっかへ飛んでしまった感じがします。安倍前首相は東京オリンピック招致が決まったヴエノスアイレスの会場で、福島の状況は「アンダーコントロール」といったのですが、「アンダーコントロール」の騒ぎではないです。いまだに汚染水は出続けておりますし、原発解体も進んでいませんし、そして何より大きいことはほとんどの地域、とくに浪江町の方々は故郷に帰れないという状況で、こういう時期に、つまりオリンピックの最後の日にこういう福島の復興を考える、浪江町の復興を考えるシンポジウムを開催するのは大変に意義のあることだと思います。板倉真琴監督の「ひとと原発」という映画を皆様ご覧になったと思うのですが、ここで描かれたことを契機にして本日のシンポジウムを進められます。

シニア社会学会が浪江町とかかわりを持つようになった時期、つまり初めて浪江町を訪れましたのは、震災後 2 年目くらいだったと思うのですが、そのときに今日ご登壇になる原田さんをはじめとした「まちづくり NPO 法人新町なみえ」の方々にほんとうにお世話になりました。私どもが初めて訪れたのが 5 月の連休のあとだったのですね。とってもきれいなところで、本当に春爛漫というか、東北の春はちょっと遅いですから、桜が咲いて藤が咲いてツツジが咲いて、桃源郷のように美しいところでした。ですが、人っ子一人いない、生き物

もいない、しーんと静寂に包まれていて、何とも言えない、これは何なのだという思いに駆られました。そのとき私は、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」という本のタイトルを思い出しました。レイチェル・カーソンは農薬被害によって自然が破壊されることによって、鳥も魚もいなくなってしまった状況を描き出しているのですが、まさにあのときの浪江は、原発被害によって生き物が突然いなくなった、誰もいなくなった。けれども自然は美しく輝いていたという胸を打たれる状況でした。私どもが浪江町に関わるきっかけになったのは、当時早稲田大学の教授であった佐藤滋先生のおかげです。佐藤先生は二本松市において浪江町から避難してきている方々を中心に「町外コミュニティ」をつくることを試みていらっしゃって、いろいろプロジェクトも進行していたのですが、残念ながらそれはあまりうまくいかなかった。浪江町については佐藤先生からはずいぶん前からお伺いしておりまして、いかに美しいところか、後ろに山を控えて真ん中に川があって、そして前面が海に開けているという、風水に適った土地なんだそうです。本当にこの世の天国のように美しいところで、いつか行きなさいと言われていたのですが、とうとう行く機会がなかったことを本当に残念に思っております。あの美しい街がもう一度取り戻せないのか、本当に復興してほしいと私は心から願っております。が、現状はなかなかそうはいかない。

板倉監督は「ひとと原発」のなかで、浪江町の人たちが何度も「悔しい」と言っておられるのをとらえていて、胸を打たれました。私の個人的な感想として、なぜ浪江町の人はもっと怒らないんだろう、東電に対して日本政府に対してもっともっと怒っていいのではないかと思うのですが、何というか怒りよりももっともっと悲しみとか悔しさという思いにとらえられているのではないかと思います。シンポジウムで浪江町の人たちがどんなお気持ちで何を考えておられるのかをお聞きしたいという気がいたします。

最後に私たちは何ができるのかということですね。浪江町、そして福島の人たちに対して何ができるのかということを考えたいと思っております。風評被害もなかなか消えないですね。今回のオリンピックでもメダリストに渡すブーケに、福島産のトルコ桔梗が入っているが危ないというような声まであって、信じられないのですが、こうした風評被害、また福島の人々に対する気持ちを変えていくのにどうしたらいいのか、というところをこれから考えていきたいと思いますし、日本政府は原発を再稼働させようとしていますけれども、それでいいのか、私たちはこれからを生き延びられるのか、そうしたことを考えていきたいと思います。私のご挨拶は以上でございます。どうもありがとうございました。

長田：ありがとうございました。本日の参加者には板倉監督の映画を事前にご覧いただいた上で、この対談会では映画に登場された方お二人をお招きして、お話を伺いたいと思っております。では次に板倉監督からご挨拶をいただきたいと思います。板倉さんよろしくお願いいたします。

板倉：皆さんこんにちは、板倉です。まず、シニア社会学会の会員の皆さんにお礼を申し上げます。映画をつくるにあたってその資金の一部を援助していただいたことに心から感謝申し上げます。今日、袖井会長からお話のあったオリンピック、「復興五輪」と途中で旗印を掲

げて進んでいった、それがいかに浪江の復興の妨げになったかというお話もさせていただきます。今日はよろしくお願いいたします。

長田：それでは会場に来ていただいている方からご紹介したいと思います。まず伊藤まりさん。伊藤さんは浪江から避難されて今横浜にお住まいですが、この映画の最初から登場していただいている方でございます。

伊藤：浪江町の伊藤です。よろしくお願いいたします。先ほどの袖井先生の浪江は本当に桃源郷のようだったというお話を受けて、5 月の浪江の風景が頭に浮かんで泣きそうになりました。今日一日、よろしくお願いいたします。

長田：もう一方、現在二本松市で時計店を経営されている原田雄一さんにも一言お願いいたします。

原田：原田でございます。私、第 7 回のシンポジウムにも参加させていただき、また代わり映えのないお話で申し訳ありませんが、ぜひ今日またお話させていただきたいと思います。ありがとうございます。

長田：ありがとうございます。よろしくお願いいたします。次に会場にお越しの松村治さんです。松村さんは東京で浪江町からの避難者の支援をこれまでされてきた方でございます。

松村：早稲田大学の危機管理研究所招聘研究員の松村治です。私は東京の江東区にあります公務員住宅で避難生活をされてきた方々と長い間関わってまいりました。今日はそんなところで経験したことをお話させていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

長田：ありがとうございます。もう一人、会場ではなく盛岡から参加されている野坂真さんです。野坂さんは実は長い間岩手県の大槌町の調査をされてきており、最近博士論文を発表された方ですけれども、津波被災地域の現状をよくご存じです。浪江も津波被災地域があり、大槌町と共通するところ、あるいは原発事故を伴っていることで大きく違うところもあります。その点についてコメントをいただければと思っております。

野坂：皆さんこんにちは、早稲田大学の野坂と申します。総合人文科学研究センターの研究員であるとともに早稲田大学文学学術院で講師を務めております。いまご紹介にありました通り、岩手県大槌町に震災の起きた 2011 年から 10 年にわたって調査研究を行ってきました。妻が大槌町出身で津波によって家族を亡くしている遺族でもあります。私もその意味で間接的な遺族ということになります。本日は、一つは 10 年間にわたって大槌町を研究してきた研究者という観点から、もう一つは被災地の遺族という観点から、コメンテーターとして参加させていただきます。よろしくお願いいたします。

長田：それでは早速本題に入りますが、まず浪江町の概要について、伊藤さんからご説明いただきたくお願いいたします。

伊藤：画面をご覧いただけますでしょうか。皆様ご存知のように福島県は東北の玄関口といわれています。福島県は非常に面積が広く、会津、それから郡山、福島市のある中通り、そして私たちの住んでいた浜通りと 3 つに大きく分かれています。それぞれの気候も文化もまったく異なった顔をしている福島県です。そして右側の方に円で描かれている部分の灰色で

塗られている部分が、浪江町、それと双葉、大熊が入っているのですけれども、こちらの相双地域という地域なのですが、その中で一番大きな人口 2 万人を超えているのが浪江町でした。事故を起こした福島第一原子力発電所は、大熊町と双葉町の境目にありました。私たちの浪江町は立地町ではありません。震災時の人口は 21,434 人、世帯数 7,671 世帯、面積は大阪市とほぼ同じくらいです。その中で 2 万人くらいしかいないということは、山間部の多い町であったということです。3 月 11 日。震度 6 強の大きな地震が私たちの町を襲いました。15m以上の津波です。海から 6km、かなり遠くまで水が来ています。多くの子供たちが亡くなった石巻の大川小学校がありますね。あそこがちょうど海から 5 ㎞の地点だったということです。皆様お住いの場所から㎞とか 6 ㎞というとかなり遠いところだと思うのですけれども、まさかここまで津波が来るとは思わなかった方々が結構いたんだと思います。浪江では死者が 182 名、まだ見つからない方も含めた数字です。ほとんどが津波による被害です。圧死というのがあって、2 階の部分がつぶれてしまった方が 1 名おられます。関連死がさらにそれを上回る 441 名（今日現在）。中には自死、つまり自分で命を絶ってしまった方もかなり多くいらっしゃいます。今現在、県内避難者が 14,164 名、県外避難者、私もそうですが、6,566 名、日本に限らず国外にも避難をしているという状況です。

福島県双葉郡浪江町の位置と放射能汚染範囲

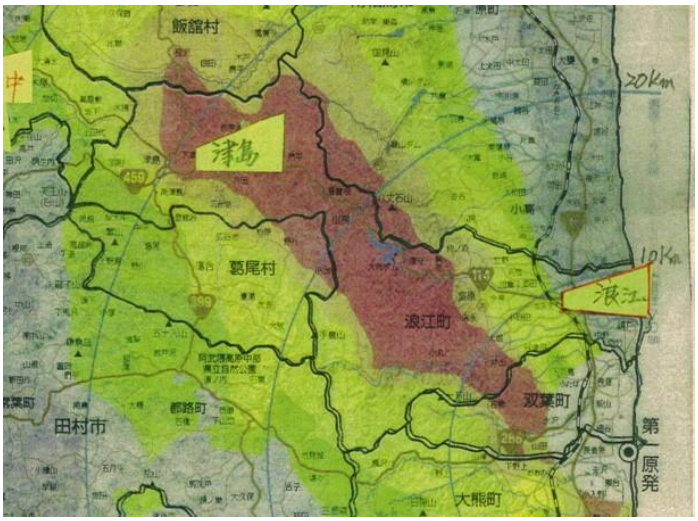
こちらの左側の写真がちょうど津波が来た時の写真です、知人から借りました。そしてこれが津波が引いた直後の写真です。ここに立っているのが知人なのですが、ここは請戸地区という住宅地だったのですね。完全に水に覆われてしまいました。その津波が去って何日か経った後の遺体捜索をしている画像です。左側の写真に自衛隊の車が止まっているのが見えると思います。約 1 か月後ですね。それまでは避難指示が出ていまして中に入れませんでした。

皆様、映画でもご覧になったと思うのですが、翌日の朝早くに避難命令が出てしまいまして、まだたくさんの方が埋もれていたと思います。まだまだ生きられる命というものがたくさんこの中にいたと思います。中には屋根の上で息絶えていたという方々もいらっしゃいますし、原田さんの映画の中での言葉にありますように、餓死、胃袋の中に何も入っていなかった状態で見つかった方々もこの中にはたくさんいらっしゃいました。

原子力発電所のすぐ近くの双葉厚生病院です。震災直後の写真なのですがこのように重症患者が廊下に寝かせられて、自衛隊のヘリコプターで順次福島県内外に運ばれていたということです。このように切羽詰まった状況で皆さんおられました。

私たちは、避難命令が出てすぐに 20 ㎞圏外に出るようにと指示を受けました。北は国道 6 号線が水没、南の方には原子力発電

所がありますし、東の方は海ですので津島という西側の方へと逃げるしかなかったのです。ほとんどの浪江の 2 万人を超える町民が津島を目指して避難していきました。避難先は、役場も 1 年間で 4 回移動しております。原子力発電所が爆発をしてどのように放射線が流れていったかを示す地図がこちらなのですけれども、大熊町、双葉町はもちろん線量は高いのですけれども、風の流れによってこのように浪江町全体を覆うように放射線が流れました。私たち 20 ㎞圏外ということですのでほとんどの住民が津島というところに避難をしました。そして津島の方に大体 3 日間くらい居ました。ただこのときは線量がものすごく高かったことは、まったく私たちは知らされていませんでした。小さなお子さん､赤ちゃんからほとんどの住民がこの津島に避難しました｡これが私が避難した津島小学校です。最初は浪江中学校に避難しましたが、20 ㎞圏外へ出よということで津島小学校へ避難したわけです。その当時 4 月 6 日の段階で 30.1 マイクロシーベルト、かなりの高線量ですね｡そのことを全く知らずにずっとここにおりました。国の方では 0.23 マイクロシーベルトが目標なのですけれどもそれをはるかに上回るものです。今はここは完全に立ち入れないところです。車で通っても一時停止をしないで素早く走り抜けてくださいと言われているところです。そこに私たちはずっと避難を続けていたわけです。



先ほどの地図を大きくした図です。津島に 3 日くらい居ましたが、さらにここからも避難するようにという町の指示がありまして、私は二本松の東和町というところに向い､3 度目の場所として木幡体育館というところに行き、ここからさらに私たち~~の~~家族は大玉村というところに行き、約 1 か月くらい過ごしました。木幡の体育館はまったく隣との仕切りもなく、何も持たずに避難してきたので日本赤十字社から配られた薄い毛布 1 枚で寒い体育館で過ごしました。ガソリンも当時はなかったですし灯油もなかったのでストーブも焚けない状態でした。夜はダウンジャケットを着込んで寝るのですが、余震も続く中でほとんど眠れるような状況ではありませんでした。これは震災後しばらくたってから訪れた時の写真ですが、知っている人も知らない人もおりまして、ここではさまざまなドラマがありました。雨漏りがするところ風が吹き込むところなど、みんなでブルーシートを使ったり工夫をしながら過ごしました。たとえば、皆でびっしりとした状態であったところに皆が通れるように通路をつくり、班ごとに分かれて取り決めをし、朝夕はみんなで身体を動かそうということでラジオ体操をしました。行政の人が入って指示をするとかいうことはありませんでした。知っている人も知らない人も心と力を合わせ、だんだん一つの家族になるというような心温まる 3 日間を過ごさせていただきました。

3ヶ所目避難所
二本松市木幡体育館

私たちの町の現状ですけれども、この地図で見ると黄色いところ水色のところが避難指示が解除されているところです。約 4 分の 1 ですね。4 分の 3 はまだまだ帰還困難区域で立ち入ってはいけないというところです。大方の皆様は浪江町は大分復興したのではないかと思っ

ているかもしれないのですけれども、まだまだ立ち入れないところがほとんどというところで、復興には程遠いという状況です。ここにちょっと飛び地のように「帰還困難区域」のところがあります。この部分はぽつんとここだけかなり線量が高い部分があるのですけれども、ここは酒井という地区でここの区長さんが自分で線量計をもって地区内のあちらこちらを測ってまわったところ、かなり線量が高いという結果が出たわけです。そこで町や国に申し出てようやく認めてもらったということでこうなっています。たまたまその区長さんとメールでやり取りしていたのですけれども、酒井への帰還の調査結果を見ると「帰りたい」という人は 23%しかいなかったということです。酒井は最初は「居住制限区域」だったのですが、間もなく解除されるということで、区長さんが制限期間内に立ち入って測ったところ、「帰還困難区域」に当たる線量であったということです。直ちに町とか政府機関に修正を依頼し、それから各マスコミにもこの事実を報道してもらって、やっと区域の見直しがされたということでした。ちょうど袖井さんの方から言われたように、声を上げないと変わらない、ということなのですね。何で福島の地域の人たちは声を上げないのだろうか、私が住んでいるところは酒井地区と道路 1 本隔てたところなので、もしかしたら私たちの地域もかなり線量の高いところがあるのではないかと思います。

「帰還困難区域」を除いての現在の浪江町の町民の人数は、約 1,600 人という統計が浪江町から出ています。そのうち元の浪江住民は約 1,000 人です。半分くらいの人のほとんど、廃炉作業ですとか、解体に関わっている作業員の方たちです。本当に広い町の中に 1,600 人

しかいないのですね。アンケート調査の結果では、浪江町の人たちのなかで「もう戻らない」と決めている人が 54.6%、「まだわからない」人が 25%、「既に戻っている」人が 8.1%、そのうち元々の浪江町民は 5.9%といわれています。「戻らない」という人がほとんどということです。

アンケート調査の回収率が、58.6%、あと 4 割くらいの人はすでにアンケートにも答えないということで、「もう浪江には戻らない」という人が町民のほとんどではないかと思います。これは古い写真なのですが、私たちがたっている足元の下で原発の燃料が燃えているのですね。燃料プールのすぐ近くです。私たちは危ないものがすく近くにあるということをそれほど意識していなかったのです。夏になったら福島原子力発電所の敷地内でお祭りがおこなわ

れましたし、商店にせよ旅館にせよ、何らかの形で原子力発電所に関わっておりました。本当に危ないもの危険なもの、放射線が降り注いだら私たちは浪江から出なくてはならないという状況にあるということを全く意識しないで毎日生活していました。

板倉：伊藤さん、さっきの帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除区域の 3 つの居住区域の図をもう一度出していただけますか。伊藤さんの住んでいるお宅はどこなのですか。

伊藤：赤と青の境界線のところです。

板倉：要するに放射線というのは、こんなきれいに酒井地区だけが線量が高いわけではないじゃないですか。他の居住制限地区もきちんと調査をすれば酒井地区と同じ結果が出たかもしれないわけですね。

伊藤:原子力発電所の位置から見て、ここですからもちろんその可能性はあったと思います。

板倉：伊藤さんが先ほどおっしゃったように、皆さんが声を上げれば全部帰還困難区域になっていたと思うのですね。これは一酒井地区がやることではなくて、国がきちんと調査をして区分をすべきだとも僕は思います。そのことを言いたいのと、もう一つ人口の問題がありましたね。今実際に浪江に住んでいる人が 1,600 人。うち浪江の住民が 1,000 人。浪江に戻っている人が 1 割だとよく言われますけれども、今浪江に登録している住民が 16,000 人です。これに対して 1,600 人で 1 割という数字がマスコミとか町自体からよく伝えられるのですが、実際は元の町民の数である 21,600 人と 1,000 人を比較するべきです。そうすると 5%以下なのです。その辺を僕は町やマスコミに言っているのですけれど、全然改めようとしない。このような数字のごまかしというのがあるということを一言いいたかったのです。(48:31)

長田：ではここで、皆さんにご覧いただいた映画の監督をされた板倉さんに少しお話を伺いたいと思います。まず板倉監督はどのようなきっかけでこの映画をお撮りになったのか、またどのようにインタビューされた人々を選ばれたのか、そのあたりについて少しお話しいただきたいと思います。また、映画のタイトルは「ひとと原発—失われたふるさと—」ですが、今日の対談のタイトルが「ひとにとって真の復興とは」と改めて別の副題がつけられております。そのことについてもここで少しお考えを伺っておいた方がよいと思います。板倉さん、よろしくお願いいたします。

板倉：はじめは自分が行きたくて行ったのではなくて、ある人に誘われて浪江に行ったのですけれども、そのときにびっくりしました。その前に岩手と宮城の被災地に行ったことはあったのですが、浪江の被災地というのは建物はそのままなのです。だけれども人がいない廃墟という恐ろしさを感じました。それで、これを記録に残そうと思ってカメラを回し始めて、そのうち浪江の人といろいろ話をするようになりました。話を聞いているときに、いつもメディアで浪江の復興する姿を見ているのと、原発被災地で見聞きする姿が全然違うということが分かったのです。で、これは残さなくてはいけないと、カメラを回しているうちにいろいろな人に

インタビューを始めたというのがきっかけです。それでシニア社会学会の方たちからやるのだったきちんとやりなさいというご支援をいただき、少し襟を正してやろうという気になったのが大きかったです。

長田：ありがとうございます。それで映画のタイトルですが、これはインタビューをされている過程でこれを思いつかれたのか、あるいは最初からそう言う狙いで人を選んでいったのか、そのへんはどうなのでしょうか。

板倉：一番最初にお会いしたのは、原田雄一さんだったのです。その次が奥様の明恵さん、そのあとが伊藤さんだったのですけれども、初めは手探り状況でいろいろな人に、帰るか帰らないかという話を聞いていたのですけれども、帰ることができない場所なんだと、要するにふるさとを失ってしまった、その原因は原発であると、また原発をつくったのが「ひと」なんだということでした。「ひとと原発」というタイトルは初めからあったのですが、その意味についてはインタビューの過程で、その思いを深めていきました。

長田：はい、ありがとうございます。それで今日の対談会のタイトルは、「ひとにとって真の復興とは？」となっており、映画のタイトルからさらに一歩踏み込んだ問題提起をされているように思うのですね。そのあたりは、これから伊藤さん、原田さんに少しずつお話を伺うということでよろしいでしょうか。では、ここで、インタビューに登場された 14 名の方々について簡単にご紹介いただきたいと思います。

板倉：映画に出ていただいた 14 名の方々の簡単なご紹介をさせていただきます。一番上のお方は原田さんのお母様（右）です。この方はとても聡明な方でこのとき 90 歳だったのですけどもきちんとお話されていましたし、何より心の持ち方がきちんとした方で、このお母さまがいて今の原田雄一さんがいるのだなという感じがしました。その下の方が原田アキイさん（左）で原田さんの奥さまです。とてもやさしくて包容力があって一緒にいてほっとする方です。原田アキイさんがいるから原田雄一さんがいるのだという思いがします。これは東雲住宅で避難なさっていた小野田トキ子さん（右）という方で、手しか映っていないのは以前 NHK のインタビューを受けたときに出来た番組が自分の意図するところと全然違うものになっていたということで、インタビューは受けますけれども顔は勘弁してくださいということで手だけになりました。この方は浪江の西、津島地区へ向かう途中の苅宿地区にお住まいで、自然とお友達に恵まれたよい環境で生活していたのですけれども、かなりの高層の東雲住宅の 11 階か 12 階に住まわれて居たのです。旦那さんが病気になられまして 2019 年の 3 月に避難指示が解除されたときに補償が打ち切られてそこを出なくてはいけなくなり、今、稲城市に住んでいるのですけど、引っ越して数か月後に旦那さんが亡くなりました。いま小野田さん自身も体調を悪くされまして娘さんの家にいます。この前お孫さんと電話で話したのですが、あまり体調がよくないようで、電話を替わってもらったときに、「映画を見ました。浪江に帰りたい」とおっしゃっていました。この方は原田さんと一緒に活動されていた神長倉豊隆さん（右）という方で、浪江ではお花屋さんをやっていました。とても実直でまじめな方で、原田さんと同じようにずっと浪江住民の幸せのことを真剣に考えておられる方です。次が半谷さん（左）ですが、大堀相馬焼の組合の理事長をやっている方で、この方はすごく朴訥で思ったことをずけっと口に出していただけるタイプの方で、とても親しみやすい方でした。永井辰夫さん（次ページ右上）、この方は偶然復興住宅の喫茶店におられまして、そこのママさんが永井さんを撮ると

すごく絵になるよと、言っていただいて時間にしてほぼ30分くらいのインタビューでしたけれども、心から本当に自分の思いを語っていただいた方です。この方も本当に悔しい思いをされています。この方は門馬晶子さん（左）といいまして、浪江にいたころから反原発の運動を旦那さんと一緒にやっていました。反原発運動をされていた数少ない存在ですが、原発事故が起きて旦那さんを関連死に近い形で失って、自分はとにかくうつ病にはならない、しっかり生きていくのだと自分を奮い立たせるようにして東京で暮らしています。これは浪江のご自宅だったのですけれども、門馬さんの後ろに写真がありまして、僕この写真を見たときにこの写真を使いたいといいましたら、この写真を撮った管野さんに連絡を取ってみますということで、次の管野千代子さん（右）と知り合いました。管野千代子さんは思ったことをずけずけという人で、あとすごくいろいろな勉強なさっています。最後に浪江について一言お願いしますといったときに「さようならあ」といったのが印象深かったですね。それは映画には出しませんでしたけど。これはご存知の方も多いと思うのですけれども吉澤正己さん、たまたま門馬さんが「希望の牧場」に行ってみましょうかということになり、「お願いします」ということで、初めてそのときに吉澤さん（左下）と会いました。この方はほんとに攻撃的で、街宣車で東京のオリンピック反対の集会と開会式で反対の声明を出すために駆け付けたのですけども、これは都庁前で演説をしている写真です。吉澤さんは一見するとすごく行動的なのですけども、普段は本当に口数が少なくて、照れ屋でシャイな方です。偶然、僕、街宣車で隣に座って撮影していたのですね。浪江、大熊、双葉を回って、お腹すいたので道の駅でご飯をたべていたら偶然伊藤さんに会ったのですね。それで伊藤さんがツーショットの写真を撮ってくれました。二人は似た者同士だとか言っていましたけども、伊藤さんに一緒に街宣車に乗りましょうと言ったら伊藤さんはすぐに逃げて行きましたね。これは小澤是寛さん（右）です。この方は地元の元建設会社の部長で、原発にもかなりかかわっていた推進派だった方ですけれども、事故後、原発に対する不信感が募りまして、原発事故が起きたら町がこうなるのだよと、マスコミが伝えない現実を東京に来て話したり、浪江に来ていただいた方を車で案内したりしている方です。ただ、ちょっと体調を崩されまして、この前電話したらかなり声が弱弱しくなっていました。またこっち来て板倉さん、いろいろ話そうよという話もしていただきました。このお二人は岡さんご夫婦（左）ですけども、岡洋子さんという名前が先に来ているように、よくしゃべるよく活動してよく動く方で、小学生か中学生の少女みたいな方でとても明るくて活動的で楽しい方でした。映画ではほんの一部しか出ておりませんがかなりの尺を撮りました。旦那さんは口数が少なくて存在感がないのですが、存在感がないことが存在している、いつも岡さんの傍にいながら、じいっと笑顔でこう岡洋子さんを見つめている、とってもいい夫婦です。これは伊藤まりさん（右）で、一番最初僕と会ったとき「板倉さん、私を撮ってもいいですけれども私は絶対泣きません、カメラの前で涙を見せませんからね」とおっしゃったのが印象的でした。最初出会ってから5年くらい経ちますけれども、これが唯一、涙らしい涙がちょっと出そうになったショットです。いろいろ伊藤さんにもお世話になりました。これは皆さんご存知の原田雄一さん（右）です。本当に原田さんにはお世話になりまして、二本松と浪江の間を車で行き来して僕を運んでくれました。そのあとも資料を送っていただいたり浪江のいろいろな話をしてくれたりして、今に至っています。それとあと、実は原田時計店さん、眼鏡もつくっているのです。この遠近両用の眼鏡を原田さんに作っていただいて、プレゼントしてもらいました。本当にあ

りがとうございました。最後に浪江の皆さん、本当に明るいですね。よい意味でアバウトで、一緒にいて楽しい方ばかりでした。

長田：ありがとうございました。それでは、本日のテーマの方に入りたいと思います。まず、「なぜ多くの住民は帰還しないのか」というところからですね。写真をご覧いただきながら進めたいと思います。

板倉：これからは浪江の方たちのお話を中心に、浪江の現状と一人一人の復興が進まないかということについてお話をしていきたいと思います。まず原田さんから、なぜ浪江に人が戻らないのか、95%の人が戻っていません。5%の人は戻っているとしてもやはり仕事の面でも偏っていますよね。仕事といえば飲食店の人が多い。飲食店の目的というのは浪江のホテルとか企業の作業員の方たち、あと建築ですね。多くの人が戻っていない。その原因は何なのですか。

原田：私は二本松にいていろんな方と関わって、とくにお年寄りの方が多いのですけれども、できれば帰りたい、という方も結構おられるんですね。でも帰れない理由というのは結構ありまして、たとえばがんを患っていた方なんですけども、ここだと大きな病院というのは福島県立医大というのがありまして、そこへいかないと長い治療はできない、浪江に帰ったのではこちらに来れない、だからいかないのだという方、つまり医療がちゃんとしていないということ、またあの頃ですとお店がないとか、生活するうえで不便なのでこちらにいるのだという方が結構多かったです。ただ、私は浪江に帰らない大きな原因は、一つは地理的な問題がありまして、私ども商店街というのは事故を起こした原発から 10 ㎞以内なのです。いろいろな原因の中でもやはりもっと心の奥にあるのが、10 ㎞以内であり放射能への恐れというのが皆さん潜在的に持つようになったのではないかと思うんですね。もう一つは、行政が町民にどんな対応をしたか、町民が本当に帰れるような状況をつくっているということを町民に伝え、たとえばそういう努力をしたか、それもなかったということなど、もろもろのことを考えて、帰ろうとする人が極端に少ないのではないかと。避難指示解除を受け入れるのは、避難していた町民にとっての国に対する最後のカードだったと思うのですね。そのカードを浪江町は捨ててしまったと、町民からすれば病院とかこれとこれをつくってほしいということを切り札として使ってほしかった、それさえ持っていればよかったけれどもそれさえも捨ててしまった。他の町のように平成 29 年月 31 日より引き延ばしてそういう交渉をしてくれればよかったのに、それさえしないで国の解除を受け入れてしまった。そういう行政上の問題、原発からの物理的な距離、病院など必要なものがない、放射能への恐れなどいろいろな要因が重なって、帰る選択をしない人が多いのだと今でも思っております。伊藤さんが先ほど説明されたような避難時の経験などもあって、皆さんおそらく帰るということを躊躇しているのではないかと、とくに子供を持った若い方々はそうですね。

板倉：簡単にまとめますけども、まず放射線の問題ですよね。あと病院などを含めたライフラインの未整備の問題、それともう一つ行政側が町として「皆さん帰ってきてくださいという姿勢が見られない」という、この 3 点ですね。そしてこの最後の行政の姿勢の問題は、実際多くの町民が言っていることです。どうしてこうなったか、というのは休憩の後の第 2 部で話したいと思います。では次に、伊藤さんお願いします。

伊藤：なぜ住民が帰還しないかなのですけれども、解除するまでの時間が長すぎましたね。8 年も経ったら避難している人たちの多くは避難している場所に定着してしまいます。とくに働き盛りの方々は、8 年間、解除されるのをただ待っていることはありません。その間に子供さんを学校に入れたり、ご自分は仕事をしたりすると思うのですね。後半に出てきます「町

外コミュニティ」にひとまとまりの人が集まって、それで皆で帰るというのであればいいのですけども、それが全国に散らばった形で長い間置かれ、8 年経って「解除します」って言われて「はいそうですか」となかなか帰れないと思うんですね。今画像を見てお分かりのように、本当に帰ってみても人がいないです。最初の頃は「なぜ帰らないのか」というアンケートも町でしていたのですけれども、「病院がないから」、「スーパーマーケットがないから」というような答えが結構多かったのですけれども、今現在スーパーマーケットもできました、病院ではありませんが診療所もできました、皆が希望していた病院、スーパーマーケットができてもまだほとんどの人が帰ってこないのです。それは帰るまでの期間が長すぎたと思います。本当に人がいないです。働く場所がありません。ここに戻って何をするのか、表向きは本当に町という形にはなっているのですけれども、実際に「生活する」という町にはなっていないと思います。

板倉：これは僕が撮影したのですけども、本当に人の姿がないです。とくに歩いている人がほとんどいないですよね。作業員の方、作業車、ダンプ、トラックはよく目にしますけども、住民の方の姿はほとんど見られないですね。

伊藤：バスもないし、タクシーもないし、外部から来る方は歩くしかないですね。車がないと生活ができないので、運転ができないお子さんとか高齢者の方というのは非常に住みづらい町になってしまいました。（避難指示解除以降は、浪江町駅前からオンデマンドタクシーが動いているとのことです。バスも動いているようですが使いにくいとのことです）

板倉：僕は免許ないじゃないですか。だから歩くしかないのですけども、すれ違うのは警官とかだけで、本当に生活の匂いがしないというところですよね。今伊藤さんがご指摘なった、帰らない理由というのは、他の土地に 7 年住んでいてそこで仕事が定着している、小学校 1 年だった子が中学校 1 年になっている、中学生だった子は高校を卒業したり大学生になっていたりする。そうしたら今更今から浪江に帰りますということにはならない、それが伊藤さんが考える大きな理由だということですね。

原田：板倉さんもう一つあるのですけども、年月の問題は置いたとしても、たとえば皆さんいろいろなところに自分のうちをつくってしまった方も多いわけですね。ところが家をつくってそこで生活していて満足しているかといえば、そういう人は少ないのです。自分の家を建てて近所に挨拶をしても、外からの人だからお付き合いしませんといわれたり、持って行ったものを返されたりとかそういう話を聞くのですね。それで浪江に帰ろうとしてももう家がないのです。うちはほとんど壊しましたのでね。今建てた家を売って浪江に戻ろうとしても、浪江の土地はものすごく価格が上がっていますから、こちらにも造れないということで返りたくても帰れないという人も中にはいます。国の住宅政策というものも間違っていると思います。

板倉：手さぐりでやってその場限りの対策に住民が惑わされていると思うのですね。今まで経験したことのない事故じゃないですか。皆が、わーっと避難してとりあえずお金で賠償してしまう。やはりそういう状況だとお金はやはりほしいわけですよ。それで急いで土地を買ってしまう。そうしたらそういうふうになりますね。

原田：第一次、第二次の復興計画の中でも、理念はすごく立派なんですね。ところ具体策が全然出ていなかったものですから、一体町はどうするのかなと不安に思って、他の土地に家をつくった方が多いわけですね。それでうまくいっているかというとそうでない人が結構いるということですね。そういう状態の中で人が戻るかどうかというと、本当に難しいと思います。

板倉：難しいと思います。本当に戻るかという話ですけども、映っている風景を見ますと 10 年経ってこれですから。一番問題なのは、全員が町を出されて 8 年間ほったらかしというか、政策もなし早急に帰れと言ってもこれでは帰れないです。浪江の人たちと話して僕が一番心に残っているのは、浪江に住んでいて浪江の人というのは本当に情が熱いし、皆仲が良くて一つのことをやるのも皆が集まって、近所の人が友達だというのが浪江での一番の思い出だという方が多いです。そこで、震災前の写真を何枚か出していただきながら、震災前の浪江の人と人のつながりについて、伊藤さんと原田さんに話していただきたいと思います。

原田：これは十日市のお祭りの写真です。おそらく昭和 30 年の行政区の単位の写真で、とにかくこの頃は全国そうですけども子供がいっぱいだったんです。

伊藤：これは田植え踊りです。浪江では地区ごとに田植え踊りがあり、私も樋渡、牛渡地区の田植え踊りの踊り手でした。これは請戸の苕野神社のところです。地区ごとに夏になるとこのように田植え踊りを奉納していました。

原田：これが十日市祭りですね。いつも 11 月 23 日前後に 3 日間うちの前の商店街でやっていた祭りなんですけども、起源は明治 5 年なんですね。そのころすごく不景気で、当時の人たちが人を集めるのにどうしたらいいかと、とりあえず露天商の方を一杯呼んで、お祭りをしながら来た人にものを売ろうと、商店街の活性化の最初の試みみたいなものだったんですね。これがずうーと私どもに引き継がれてきたものですから、浪江の人にとって秋というのはこのように十日市が定番のお祭りでした。ただ今年は冬になったんですね。

板倉：僕は浪江に行ってびっくりしたのですけども、これ請戸川ですよね。泉田川とも言いますし、浪江の方たちは同じ川でも自分の地区の名前で呼びますから。

伊藤：ここらあたりは泉田川と呼んでますね。

原田：伊藤さん、ここは請戸川です。ここは河口から 1 ㎞ないくらいのところです。

伊藤：請戸川がずーっと回って泉田川に変わって、そして室原に続くと室原川に変わっていくんですね。それぞれ自分の住む地域によって呼び名が変わります。

原田：ところが高瀬川だけはずーっと同じ高瀬川なんですね。

板倉：この鮭の漁の話を聞いてびっくりしたのですけども。

伊藤：すごい量の鮭が獲れますよね、請戸川で。例えば私が仕事から帰ってくると、玄関先に袋の中に 5 本くらい鮭が入ってぶら下がっているのです。大体オスの鮭なんです。川に上ってくる鮭は実がボロボロで本当はおいしくないですけれども。いくらなんかはそれぞれの家庭で作りますね。秋になるとまた来たかというくらい、鮭はあちらこちらの家庭から回って来るというようなものでしたね。

板倉：春になると山菜で。

伊藤：そうです。季節ごとにいろいろ自然のものが味わえます。

原田：鮭の養殖というのは、東北では 2 番目くらいに早かったですし、量もすごく多かったですね。

板倉：本州では一番漁獲量が多いみたいですね。

原田：多い時もあったんですね。今他でもやっていますので、どんどん下がってきていますけどね。

板倉：これが今、帰還困難区域である津島の人の踊りですね。

伊藤：津島というのは町の中心部から少し離れたところにあるんですけれども、このようなお祭りであったりそういったものは、皆楽しみにしているのですね。自然の暮らしをしていました。畑で野菜をつくり、米をつくり、キノコを採って、そしてこのようなたまに来る芸能の人達を楽しんでいました。贅沢なことはないんですけれども、人間としてよい暮らしをしていたなという場所ですね。

板倉：僕はいつも原田さん、伊藤さん、その他の浪江の方から震災前の浪江の話をお伺いして、何もないんですけども人間の生活として一番必要な自然の食べ物、人の心があった町で、東京に住んでいる僕よりも、なおさら住民同士の交流、コミュニティが壊されたときの衝撃というのはすごく強いと思うのです。とくにお年寄りはその負担というのですか苦しみは強かったと思うのですね。ここで、松村さん、東雲住宅で毎週一回被災者と交流をして、震災直後から避難指示が解除されるまで 8 年くらいになるのですか。被災者の様子をご覧になってきて、コミュニティの大切さについて実感されたでしょうか。

松村：今の社会は、とくに大都市の住民がコミュニティなんかなくてもいいんだというような考えにだんだん流れていってしまっているのを見ると、今お話のあったこのような人とのつながりの強さや伝統文化に支えられた生活様式が絶対必要なんだとすごく感じるんですね。都市に住んでいる人たちはそんなものはないから、なくていいんだ、そんなものは田舎のライフスタイルだというような見方をしているのは大きな間違いだと思います。これは自然と関わるということとを併せて、コミュニティとのつながりを持っているということは人間として一番大事なこと、それが失われてしまったらどうなるのかをよく感じさせるものだと思います。

それからもう一つ言いたいのはですね、なぜ戻らないのかということに対しては、東雲住宅の方々を見ていてどんな生活だったかというと、いろいろな場所から避難してくる方々は、まず半年だけいなさいといわれ、それが 1 年になってまた次の年もここですということになり、1 年ごとに言われ続けたのですね。最初から 5 年経ったら戻るというような予定で住んでいるのであったら、つねに戻ろうという意識を持てたと思うのですね。それが 1 年ごとにまたここに住んでくださいと言われてしまうと、だんだん帰還する意識が薄れてしまう。もうひとつ大きいことは、東雲住宅はすごく便利なところなのですね。周りにクリニックとかスーパーとか何でもあるわけです。また支援の形で落語を見に行くとか相撲を見に行くとか、そんなお誘いの機会もあり、利便性と都会の楽しみに段々慣れてきてしまった、都市志向になってしまったのですね。そういうことと帰還する目標が持てないことが合わさって、だんだん帰還する気持ちが薄れていったというのが私の印象です。

板倉：ありがとうございます。では野坂さん、大槌に 10 年間通い続けて、津波のひどい被害を受けて役場そのものが津波にのまれて町長以下役場職員のほとんどが犠牲になり壊滅的な状況になったところですけれども、今浪江の話をお聞きになって、コミュニティが破壊されたことによって浪江の住民が大きな苦しみの中にいる状況について、野坂さんの立場から一言コメントをいただけるでしょうか。

野坂：まず、大槌町の被害については、役場の話がよく報道でクローズアップされますけれども、それだけでなく、町民の 1 割くらいが津波で死亡または行方不明になっていることも重大な事実です。さらに、震災後に約 3,000 人の方が岩手県内陸や県外含め町外に移る経験をしているということも重大な事実です。大槌町はもともと人口 15.000 人くらいの小さな町で、死亡または行方不明となった方が 1,286 人いらっしゃるので、津波を生き抜いた約 13,000 人のうち 4 人に 1 人くらいは直後に町外に移る経験をしているということです。コミュニティについては多くの被災地で問題として出てくるのですが、大槌町もコミュニティが大きく変動してしまったことについては、浪江町と類似している部分はあると思います。私たちは、被害について亡くなった人の数など「量」に注目しがちなのですけども、コミュニティの変動やいま生きている人々の悩み・苦しみなど被害の「質」も大きな問題です。今回の映画を見た時に、やはり津波被害と原発事故とで被害の質の違いというものが実感を持って伝わってくると考えておりました。大槌は津波で、浪江は津波と原発事故、という形で災害要因が違うわけですけれども、津波は一瞬で命が奪われてしまいコミュニティも変動していくという特徴があると思うのです。これに対して、原発事故というのは非常に長い時間をかけてふるさとやコミュニティがむしばまれていく、という違いがあるというふうに思いました。そうした観点で映画を見ていると、登場される方々の何気ない日常的行動が映像に映っていて、そのような日常の中に災害が入り込んでくるような部分に、津波と比較してではありますが、原発事故の怖さがあるのだということを非常に強く感じました。日常の中に災害が入り込んでくる怖さを感じるには、映画に登場された方々の背景を知ることが重要と私は思います。もしよろしければ板倉監督にお伺いしたいと思っていたのは、この対談の中で背景をお話しいただいて、「だからこういう発言になったのだな」とよく分かったのですが、映画の中ではそういった背景はあまり説明されていないように感じました。あえてそのように編集されていたのかなと思ったりもしたのですが、もし何か意図がおありでしたら一言お聞きしたいと思いました。

板倉：そのあたりのことは袖井会長からも手厳しく言われたことなのですけども、あえて意図的にやったわけではないです。でも背景を説明するのではなくて、登場する人の感情ですね、感情だけで何とかつなげていけないかなと、そういった意図はあったことは確かです。あえて外したのではなくて、14 人もの人がいますので、尺的に難しかったというのもあります。

野坂：ありがとうございます。私は日常に災害が入り込んでくる描写が重要と感じましたので、背景が大事かなと思った次第です。

板倉：ありがとうございます。では長田さんお願いします。長田さんは、7 年にわたって「フクシマを忘れない」というシンポジウムを続けてこられました。2013 年に浪江町に入っています。ですから浪江とのつながりかなり歴史があるのですけど、その上で浪江のコミュニティ崩壊の話を受けてコメントをお願いします。

長田：2013 年に初めて、袖井先生、ここにおられる坂林さんをはじめ、10 人以上のシニア社会学会のメンバーで浪江に行き請戸までずーっと案内をしていただきました。放射線は通過する道筋で測りながら行ったのですけれども、ずーっとピーピー音が鳴る状況の中を行きました。そのときの印象が強くいまだに残っています。コミュニティの問題というのはやはり現地に住んでみないとわからないところがあって、今日のように写真を見せていただきながら原田さん、伊藤さんから説明していただいて初めてわかるような状況なんですね。ですから私などの実感というのは、私は吉祥寺に昭和 23 年頃から長く居ましたのでその当時は近所づきあいも強くあったのですが、成長するにしたがってマンションが周りにいっぱい建って隣の人のことにはあまり関心がないというような傾向が増え、徐々に失われて私自身都市の生活にだんだん慣れてきたというところがあります。コミュニティの大切さというのが失われてきたというのは感じています。都市の便利さの中で危機的な状況でもなければ、そういうつながりが失われても何の不都合もないような生活をしてきたのですけど、東日本大震災以降というのは状況はだいぶ変わってきているのですね。私は今千葉に住んでいますけども、阪神淡路大震災を経験した人が自主防災組織をつくったあと、東日本大震災をきっかけに何とか地域をまとめていかなければいけないのではないかという動きも出てきていて、今自主防災組織の活動を今やっているのですけれども、都市は都市で新しいコミュニティをつくるというような動きが出てきている。そこに東日本大震災というものの影響があるのではないかと感じています。そういう意味では、これまであったつながりをそのまま取り戻すということはもうできないのかもしれない。それでも少しでもそれに近づけるような暮らしを町民同士が新たに作っていくことができれば、それはすごくいいことではないかと思います。私自身も都市で、見知らぬ人同士が都市の便利さにすべて依存して生活するというよりは、自分たち自身が相互依存関係をつくっていくことができるようなコミュニティを新たに作っていかなければいけないという思いに駆られているので、私はそう意味で浪江の方々の苦しみを多くの人々に知っていただきたいという思いで、2015 年から「フクシマを忘れない」というシンポジウム、これは袖井会長がこのタイトルをつけられたのですが、これは良いタイトルだと思いながら、私よりもここにいる松村さん、あるいはいわき市で調査研究を続けている川副さんたちと一緒に、この活動を続けてきましたしこれからも続けていきたいと思っております。

板倉：いま長田さんから、改めてコミュニティをつくっていかなくてはいけないというお話を伺ったのですけども、その流れの中で、崩壊されたコミュニティを再生しようという動きがありました。それは今日参加されている原田さんが中心となって進められた「町外コミュニティ」です。ここで 10 分の休憩を取らせていただき、第 2 部で原田さんからそのお話を、新たな国家プロジェクト「イノベーション・コースト構想」との関係を含めて伺いたいと思います。

休憩

板倉：では第 2 部に入りたいと思います。では原田さん、よろしくお願いいたします。

長田：原発事故による強制的避難によりコミュニティが破壊されたという状況の中で、失われたコミュニティをどう再生していくかという問題に、住民の皆さんが取り組んだ経緯があります。原田さんたちのグループが中心になって進めた「町外コミュニティ」の構想です。原田さん、その経緯についてお話しいただけますか。

原田：ありがとうございます。その前に袖井先生がおっしゃった「フクシマを忘れない」というお気持ちですね。私どもですら 10 年になりまして、忘れようとしている部分もあるにもかかわらず私たちをずっと見ていただいている方々がそのような気持ちを持ち続けていただいているということに改めて感謝申し上げたいと思います。「町外コミュニティ」という言葉は震災を経験するまで私らはわからなかった言葉なのです。初めて聞いた言葉です。避難しましたときに、一緒に避難した住民たちと地域を何とかしようという考えはおそらく、私どもが「新町商店会」という一つの商店会をみんなでやっていた、商業というのは地域の人のご支持をいただきながら生業としてやっていくものだということを身にしみて感じていたことに、地域を何とかしようという気持ちになった由来があるのではないかと今でも思っております。最初避難したときに、商店会の人たちがみんなで仕事を続けていくにはどうしたらいいかということを商工会で考えたことから始まったのです。私は商工会の副会長だったものですから、それを復興試案ということで会長名で県の副知事までもっていって、これはいいですねということになったのです。そのときはこのような考えで動いていきたいというあいさつ程度のことでした。その過程で平成 24 年（2012）4 月に町から配られた冊子が来ました。そこに「町外コミュニティ」という言葉が出てきたのです。それを読んでみると私たちの考えていることとほとんど同じだったのです。こういうのがこれから作っていく上で大事なことなのだということで、それをどうしたら具現化できるかということを、当時、早稲田大学の佐藤滋先生が研究室のお仲間の方々とずっと私どものところに来ていただいていたものですから、そのアイディアを実現するための計画をつくろうということで、先生にお世話になりながら私らなりの「町外コミュニティ」計画をつくりました。その理念は、みんなが一緒になって浪江に帰ってそれぞれ前と同じ生活ができるようになった時が、僕は復興だと思って疑いませんでした。ですから避難したときにこのままでは帰れないのではないかということになって、それでは皆が一緒になって町外で暮らす計画を立てて、帰れるようになっ

『町外コミュニティー』と『イノベーションコースト構想』 資料・2 （その1）

年月日	出来事および町民の動き	行政	
		町外コミュニティーの動き	イノベーションコースト構想の動き
2011.3.11	東日本大震災		
2012.1	A. 離散した浪江住民の繋がりを維持することを目的とした『まちづくりNPO新町なみえ』発足		
2012.4.19	B. 浪江町が『浪江町復興ビジョン』を発行 その中に、『町外コミュニティー』の必要性を明記		
2012.8.18	C. 『まちづくりNPO新町なみえ』、『24のプロジェクト』を発表。その中に『町外コミュニティー』を明記（上記の町の方針を受けて）		
2013.9.7	東京五輪開催決定		
2013.11			O. 具体化に向けた検討会の設置
2014.6			P. 構想の具体的な全体像を発表 東京五輪開催にあわせて福島の復興を内外に示すことを当面の目標とする
2014.12		D. 3団体による『町外コミュニティー』の基本計画を発表	Q. イノベーションコースト構想推進会議を設置（前町長も参加）
2014.12		E. 上記の基本計画を前町長に提出するも、反応は無し	
2015.6	F. 999人の署名とともに福島市長に計画書を提出。 市長は前向きな 姿勢を示すも、浪江町は福島市に打診することなく、計画は立ち消えとなる。後に、当時の副市長が、「町外コミュニティーを認めたら、利便性の面で、町民が浪江町に戻らない危惧があった」と供述		

たら一緒になって帰るということを考えたわけです。

板倉：途中で申し訳ないですが、原田さん、今ここに年表が出ているのですけども、2012 年の 4 月 19 日に『浪江町復興ビジョン』を発表し、その中に「町外コミュニティ」の必要性を明記してありますね。それをもとにして原田さんたちが動き出したと、街が推奨したのだから自分たちもこれで動いてみようと、それで 2012 年 8 月 18 日に「24 のプロジェクト」というのを発表してその中に「町外コミュニティ」を明記して具体的に動き出したという流れですね。

原田：そうですね。2012 年 8 月 18 日の発表の時には町長もおいでになったのです。町長にこういうことをやりたいと言ったら、町長も「わかりました。皆さんのお考えを引き受けてやっていきたいと思います」とはっきりおっしゃったのです。「24 のプロジェクト」の 24 番目というのが、30 年から 40 年後に被災地が本当に復興したときに世界中の人たちからいただいたご支援に感謝の意味を込めてオリンピックをしましょうと書いてあるのです。福島、いわき、宮城を開催地にしてやりましょうと言っていました。これが 8 月ですが、2013 年 9 月に東京オリンピック開催が決定したのです。したがって、このことはすごく複雑な気持ちで受け止めました。何故このようなことが今出てくるのか、まだ復興なんかしていないと皆で思いました。二本松を「町外コミュニティ」にすることも考えました。それは佐藤先生とも話をして、避難している人たちがそれぞれの地域で浪江人としてのアイデンティティを保ちながら、浪江の風習や文化を失わずに持ち続ける場所として考えていきましょうと、そして浪江が帰れるようになったしかるべき時にみんなで一緒に帰りましょうということにしたわけです。ところが町長さんは一人でも帰る人がいたときはインフラを整備しますといったのです。そこで、町の考え方と私どもの考え方のずれが出てくるのです。それも避難者が帰らない一つの原因ではないかと思います。そういうことで私たちは「町外コミュニティ」として適当な場所を探していると、いろいろ反応してくれる方もおり、南沢又という地区の方々が「あなた方がそうするならここを使ったらいいですよ」という提案をしてくれました。

町外拠点の整備に向けた施策を求める要請書を小林香・福島市長（右端）に手渡す浪江町民ら＝福島市役所で

浪江町民ら

町外拠点 福島市に要請

医療施設など整備

500世帯居住構想

原発事故に伴い全町避難が続く浪江町の商工会や町民でつくるNPO団体は4日、福島市の小林香市長と面会し、福島市内に500世帯2000人分の浪江町民のコミュニティーを整備するための施策を行うよう要請した。町商工会は浪江町のコミュニティーを守るための「町外拠点」と位置付けており、小林市長は「市としてできることはしたい」と述べた。【土江洋範】

要請したのは商工会と町民35人でつくる「まちづくりNPO新町なみえ」のほか、町外拠点の運営母体として設立した一般社団法人「なみえ復興町づくり協会福島」の3団体。外拠点の候補地は福島市中央部の南沢又地区と八島田地区にまたがる農地約40万平方メートル。商店や医療施設なども整備する構想で、3団体は既に約120人の地権者から土地提供の承諾を得ているという

毎日新聞2015（H27）年6月5日

板倉：「町外コミュニティ」というのは、浪江以外のある程度の土地に、住宅とかインフラを整備して 2,000 人から 3,000 人の規模で、浪江住民として暮らしていこうといった内容ですね。2,000 人から 3,000 人というのはあくまでその土地の大きさによりますが、理念としてコミュニティを大事にしていきたいという思いから始まったわけですね。そして 2012 年 8 月 18 日の『浪江町復興ビジョン２』の中に、「一人ひとりの暮らしの再生」、「分散している避難状況を改善するために、集約した『町外コミュニティ』でだれでも安心して暮らせるようにしていきます」という表現を掲げていて、2014 年 12 月に原田さんたちが「町外コミュニティ」の基本計画を発表されていたわけで、このときに福島市内のある土地を利用した構想ができていたわけですね。そのあと、その企画書をもって前町長に提出したのですね。

原田：そうです。なぜそうしたかというと、そのときに使う予算が「福島県復興特別措置法」によるものだったのです。それによると最初にやることは被災地の長が避難地の長に挨拶す

るところから始まるということで、町長に計画を持って行って町長に挨拶に行ってもらうところからモノが動き出すことになります。そこで当時の浪江町長に計画を提出するところまで行ったものですから、あとは浪江町長から福島市長に私どもが作成した「町外コミュニティ」の計画書を持って行ってお願いしてくれるのを待っていました。ところが町長は、実際は福島市長にお願いしていなかったのです。それで町に依頼したのではだめだと思い、町民の総意で動こうと思って 1,000 人の署名を集めました。私どもはそれをもって福島市長に会ってお願いしますという挨拶をしたのですが、福島市長はそのときに、福島市長は福島市内の浪江の「町外コミュニティ」に「浪江区」という名称を付けてもいいですよという話までしてくれました。でも福島市長はこの法律が使えないと実行に移せないということをおっしゃって、馬場町長から依頼があれば計画を実行しますということを言われたのです。あれだけの大きな土地を市街地にするというのは大変なことなんですね。そのときのことが 2015 年 6 月 5 日の毎日新聞の記事になっています。そのためにいろいろな法律の手続きがありまして、その措置法を使えば一挙に出来たのです。45 ヘクタールあるその農業用地を宅地化するということになると農業委員会にかけてとか、いっぱい種々の手続きがあるので、それを一回の手続きでできるということでこれを使おうと思ったのです。ただそのときに言われたのは、いわき市とか他のところでは「町外コミュニティ」をつくっても、みんな浪江に帰ってしまったらそこは廃墟になるのではないかということでした。ところが福島市のここは、市街地の近くにあるもので、そのような心配はないとコンサルタントから言われました。皆が退去するときになっても、ここは絶対売れるということでした。私らがコミュニティを考えるときには、ここはまさに理想的だと思った記憶があります。どうしてできなかったかを今考えると、町長さんの資質などを問題にしがちですが、私たちがこの案を提出する過程にも問題があったのではないかと、思います。というのは、これはほとんど内密のうちに進めたのです。その前にいわき市の例がありまして、避難する人がそこへ行くと地価がどんどん上がって３～４倍になったのですね。そうなるとそこを買おうと思っていた地元の人が買えなくなってしまい、買ったのは避難者だということで、避難者と避難先の人たちの間で対立が生まれたのです。そこで、そのようなことが絶対あってはならないと思い、決まるまでは親しい人にも言えなかったです。そのような進め方をしたのですが、本来、「まちづくり」というものはみんなで一緒に進めるべきものですね。そのことについては今も忸怩たる思いですが、でも進めているときには時間との戦いでもありました。町民たちは、他に土地を求めてどんどん移っていく、またここを買う人がいるのではないかなどの心配がありました。それで何とか早く進めたいと思って進めたのがこの地区についての経過です。

板倉：そうするとそのように内密に進めたことで、浪江町民の総意を得ることができなかったということが、実現できなかった要因の一つであったということですね。

原田：そのことは、できた後に次の人たちにどう伝えたらよいのかということを思うと、今では反省しています。そこは、行政の方で地価高騰を招かないように網をかけるなどの方法をとることもできたのかもしれないということも後で学びました。したがって、このような試みの裏で別の動きがあったことを知らされなかったことへの憤りから、町長への批判的な思いで原因を矮小化していったように感じます。それで、自分たちの案が実現できなくなったことが分かったときに、「これで、昔から町民がつくり上げてきた文化や生活様式によって営んできた、また人との付き合いで支えられてきた浪江町はなくなる」という思いに駆られました。

板倉：年表資料その２を見てください。そのあと 2015 年 9 月に、浪江町が『なみえ復興レポート』というのをつくっています。その中に「国のイノベーション・コースト構想と融合するまちづくり」という表現が出てきます。そしてそのあとに町長選があります。「浪江は一つ」というスローガンを掲げた現職が圧勝します。その翌年、町長選 4 か月後に検証委員会が報

『町外コミュニティー』と『イノベーションコースト構想』 資料・2 （その2）

年月日	出来事および町民の動き	行政	
		町外コミュニティーの動き	イノベーションコースト構想の動き
2015.9		G. 浪江町が『なみえ復興レポート』を作成。その中に『国のイノベーションコースト構想と融合するまちづくり』と明記	
2015.11	H. 町長選。「浪江はひとつ」とスローガンを掲げた現職が圧勝		
2016.3.22	I. 検証委員会が報告書を提出。放射線の安全基準を20倍まで許容することを明記		
2016.9	安倍前首相がリオで、福島第一原発について、アンダーコントロールできていると発言	https://www.youtube.com/watch?v=DDZvpUyFA94&list=UU6Tz2XHDBBTU7soM2-Y2ZWA&index=13	
2017.3		J. 策定委員会による浪江町復興計画（第二次）を発表。『町外コミュニティー』の文字が消える。その理由として、「帰還ができない時には一時的な拠点を求めたのは確かだが、解除されたのだから戻るのが本来の姿だ」と見解を示す。	
上記と同じころ	K. 前町長が、『町残し』に取り組むと談話		
2017.3.31	L. 避難指示の解除		
2018.6.27	M. 前町長、死去		
2019.3	N. 住宅支援などの補償の打ち切り		
2020.2			浪江の復興のシンボルとされる水素工場の完成

告書を提出します。そしてわれわれが普通の生活をしているときには放射線の安全基準は 1 ミリシーベルトですが、それを年間 20 ミリシーベルトまで引き上げると明記しています。そのあとはなし崩し的に、それを基準として避難指示解除まで向かいます。2019 年 3 月に住宅の補償支援の打ち切りとなります。この流れを見ていますと、町自体が何が何でも避難指示を解除して住民を戻すのだという方針転換になっているわけですね。

原田：私もこの町長選で、どうしても諦めきれなくて町長候補に弟を出したのです。でもこのときの選挙は、町民がバラバラですので、通常の選挙とは全く違った状況でした。結局、現町長の圧勝となりました。

板倉：私は、町の構想の変化を調べていて、注目するのは、町は最初のうちは「どこに住んでいても浪江町民」であることを尊重するといっていたにもかかわらず、ある日突然、原田さんたちが計画していた「町外コミュニティ」がきちんとしたものであるにもかかわらず、ほとんど反応がなく福島市にも提案書を持っていかなかった。そこで明らかにそこで何かが変わったと思うのです。その変わった方針でずっと続いているのが今の浪江町の復興のあり方だと思うのです。

原田：はい、その変わったターニング・ポイントは 2016 年 3 月 26 日「検証委員会」と「まち・しごと創成総合戦略」という方針が国から出されたときだったと思います。この検証委員会は町民不在で、基本的には 5 人の有識者から構成されているものです。本来なら町民に任せるべきだったと思います。

板倉：この検証委員会も、報告書も、その背後に別の動きがあったと思うのです。そして僕の想像ですが、その裏に「イノベーション・コースト構想」というものがあったと思うのです。

原田：たしかに今だからそう思えるのですね。

板倉：伊藤さん、その「イノベーション:コースト構想」について簡単に説明してもらえますか。

伊藤：皆さん「福島イノベーション・コースト構想」というのは耳にされたことがあると思うのですが、農林水産業、環境、エネルギー、ロボット、廃炉、こういったものの研究機関、主要施設がすでに出来ています。浪江には水素エネルギー研究フィールドがつくられております。トヨタ、ニッサンなどの自動車工場がこちらの水素工場のエネルギーを使うことを考えています。また

R-1

オリンピックの聖火ランナーもここを走る予定だったのです。しかし多くの住民が、ここは本来の浪江町ではない、ここは見せないでほしい、ということでコースを変更したのです。「ロボット・テストフィールド」、私たちの震災の様子を伝える「原子力災害伝承館」、これもイノベーション・コースト構想の中に入っています。あとは「廃炉研究」、日本原子力開発機構が運営しているものです。そういった総合的な構想が、経済の復興という名のもとに進められているという状況です。今年度の研究機関関係の予算の概算決定額は 75 億円ということです。それは全体の一部の金額で、総予算はもっともっと大きな金額です。

板倉：イノベーション・コースト構想というのは、年表その 1 で見ると、2013 年の 9 月 7 日の東京オリンピック開催決定の 2 か月後 11 月に、具体化に向けた検討委員会の設置をしているのです。驚くことにその約半年後には、今伊藤さんの説明された具体的な内容のものを立案しているのです。これはちょうど原田さんたちが「町外コミュニティ」の計画を立案して提出していた時期と一致するのです。2014 年の 12 月に旧「イノベーション・コースト構想推進会議」を設置して、そこに双葉郡の 12 市町村の首長を呼んで、会議を 5 回にわたってやっています。しかし、それについて各自治体の首長さんたちの意見を聞くといった会議ではなく、一方的にこういう内容のものをやるという説明であったように想像します。次に大事なのは、2014 年 6 月「イノベーション・コースト構想」を発表し、これを東京オリンピックの開催に合わせて、福島の復興計画として内外に示すことを当面の目標にするということだったのではないかと思います。要するに浪江町がこれだけ復興していることを内外に示し、この頃から「復興オリンピック」という言葉が使われ始めたと思います。同じころに原田んたちが「町外コミュニティ」を発表しているのですね。前町長の立場からすれば、「イノベーション・コースト構想」という大きな国家プロジェクトに、何とか浪江を救えるのではないかという思いに駆られたのではないか。そうなると「町外コミュニティ」案はその妨げになるわけではないでしょうか。その頃、副町長が「町外コミュニティ」などができると、皆浪江に帰ってこなくなるといっているのです。想像の範囲を超えませんが、「イノベーション・コースト構想」「東京オリンピック」の実現によって、浪江町が復興する姿を何が何でも内外に示すという思惑が、「町外コミュニティ」にとっては不幸なことではなかったのかなと思います。その流れが、今の住民不在の復興の形になっていると思うのですね。だから多くの浪江町民たちは、町に対してすごい不満があり、不信感があるし、信頼もないし心が離れて行ってしまうという流れになったと思います。ここで、「復興オリンピックという虚飾」というビデオを見てもらいましょう。

ビデオ終了

板倉：これは去年（2020）3 月に撮ったものです。これだけインチキなことをやっているのですよ。袖井さんも言っておられましたが、これだけ「復興オリンピック」と言っておきな

がら、今年のオリンピックで復興のフの字も言っていませんでした。その中で原田さんたちがやろうとしていた「町外コミュニティ」が、いとも簡単に黙殺されたわけです。これが本当に行政のあり方か、というところに僕は疑問を持っているのです。

原田：前の町長は、私どもが「町外コミュニティ」の案を出しとときに、今の年表からですと、もう「イノベーション・コースト構想」のことを知っていらしたわけですね。しかし「イノベーション・コースト構想」が逆に町民を帰さないことになっているということは、本当に皮肉なものですね。私は「町外コミュニティ」が駄目だとなったときには悔しくて、役場の職員の何人かに、「僕らはここまでは考えたけど、これが駄目だったということは、あなたたちにはもっと良い考えがあるのではないの」と聞いて、「それがあるのだったら出してほしい」といったのですね。しかしそれを出さなかったですね。おそらくその考えというのが、板倉さんの今おっしゃった「イノベーション・コースト構想」の流れなのだと思います。だから言わなかったのでしょうね。これはあくまでも憶測ですが、まだその人たちはいますので、このようなことは事実としてきちっと残しておいてほしいと思います。

板倉：「イノベーション・コースト構想」というのは、要するに住民は戻ってこなくてもいいのですよ。そこでは仕事と雇用を生めばよいという考えです。しかし、それは浪江町民が望んだ仕事ではないわけです。一部の人たちはやっていますけども。雇用なんか生まれっこないじゃないですか。

原田：雇用は生まれないと思います。

板倉：国も県も町も、これ以上、浪江町民が町に戻ることを望んでもいないし期待してもいない。ではなぜやっているのかということになりますね。僕は、そこには利権の匂いしか感じられないのですよ。表向きは「双葉郡の復興」のためにこれだけのことやっているということです。双葉町に元の住民が戻ってくると思います？　「伝承館」など作っていますけれども、僕は、住民は戻ってこないと思います。だけど、こういう流れを何らかの形で止めなくてはいけない。本当に、孤独なお年寄りとか弱者をきちんと行政で救う手立てはないのか、ということを真剣に具体的に考えていかないと、犠牲者は増えますし、本当にこんなことでいいのかという情けなさを感じるのです。その辺は、伊藤さんいかがですか。

伊藤：最初に皆様に写真で見ていただいたように、本当にのどかな田舎町だったのですけれども、私たちが待ち望んでいた町の復興の姿とは本当にかけ離れてしまったという感じですね。別の町になってしまった感じです。

板倉：このあと、参加者の質問を受けるのですけれども、原田さんのお考えがあったらおっしゃってください。

原田：この 10 年というのは、皆な曖昧な中で動いてきただと思うのですね。たとえば、伊藤さんがおっしゃったように、これは本当の復興ではないなと思うと、本当の復興っていうのは何なのかということを、皆ですり合わせてこなかったのですよ。あの当時の復興というのは、あの当時の人々が浪江に帰って元の生活に戻ることが復興だと思っていたのです。ところがそれがこの 10 年の間に変わってきているのですね。しかし今の姿は、おそらくわれわれにとっては復興ではないのではないか、では本当の復興って何かといえば、それは一人ひとりが自分で生活できるようになることが復興だと思いますが、今はそうではないですね。私たちは、いろいろやってきたけども今こんなふうになりました、でもこういうことになってはならないのではないですかということを何とか訴えたいのです。それが現在僕のできなかったことに対する償いではないかと思っています。こんな復興になったら絶対にダメですよ、

ということと自分がやってきたことはやはり意味があったということを頭に入れておくことと、そのことを次の世代に残していきたいということが現在の僕の課題だと考えております。

板倉：一人ひとりの復興はそれぞれみな違うわけです。心の復興も含めて一人一人の復興を尊重しなくてはいけないと思うのです。「町外コミュニティ」をつくったからそこに必ず住みなさいというわけにもいかないわけです。「町外コミュニティ」というのは、本当に孤独な人、弱者、子どもなどにとっては必要なのだと思います。したがって原田さんたちの計画した「町外コミュニティ」というのは決して無駄ではなくて、人によっては必要であった計画として価値があったし未来につなげてもらいたいと思います。したがって、復興は人それぞれにとって違ったものであるのではないか、われわれができるのはその手助けしかないと思います。ふるさとを失い仕事を失い家族を失うことは、それだけ大変ことなのではないでしょうか。ということで、具体的に一人ひとりの復興（復興という言葉が正しいかどうかは別として）を目指すために、何が必要で具体的にどのように動くべきなのか、ご意見ご感想を参加者からいただきたいと思います。

長田：はい、それでは参加者の方にぜひご意見、ご感想を伺いたいと思います。

松村：少し前ですが浪江の駅を降りて歩いたら、あたかも高度成長のときの何もないころの分譲住宅地のように感じました。そのあとどんどん家が建っていくというのが高度成長のときの風景なのですけども、浪江町の場合もそのように変わっていくのだとすれば、震災以前の浪江町の伝統や文化の中で人が生活していた浪江町がまったく消えてしまうということになります。原発事故がもたらしたものというのは、本来の浪江町を消失させてしまったということになると思います。本当に浪江町の復興ということを考えるのであれば、町民が戻ってそのような伝統や文化を取り戻すような復興でなければならないと思います。今は全然逆の方向に行っていますから、これからは何としても町民が戻れるような復興を考えていかなければいけないと思います。高齢者だけが戻りたいというだけではなく、若い人たちも浪江出身の人は今浪江の現状がこうだから自分たちが何とかしなければいけないという気持ちをもっともって、原田さんがおっしゃるような本来の浪江町を復興させるという方向で少しでも動いていかなければいけないのではないかと思います。

板倉：野坂さん、一人ひとりの生活の再建に向けて手を差し伸べるためにはどのようなことがあるのかについてご意見はありますか。よろしくお願いします。

野坂：津波災害のことを念頭にお話させていただくと、たとえば仙台市を中心に「災害ケースマネージメント」という取り組みが行われております。こうした被災者個々人の状態に合わせた支援は、それはそれで必要です。ただ同時に、個々人の動きが集合化していった結果として地域あるいはコミュニティの復興が生じることがあると思いますが、地域あるいはコミュニティのレベルについて検討するときにはまた別の問題があると思います。このレベルでは、地域の復興の当事者である住民が、その地域で生きていく上で大事にしていることをうまく表現できる仕組みをつくっておくことが重要です。津波被災地では、震災から 3 年目か 4 年目くらいまでは地域外から多くの支援者に入ってもらい、目の前の課題解決に当事者と外部の支援者とが一緒に奔走できていたケースが多かったと私は感じています。しかし、震災から 5 年目や 6 年目ころになると、外部の支援者と住民とで、あるいは住民同士でも目指している地域の復興の姿がずれていくというケースが様々な場面で起こってきたと私は感じています。そのずれがもっとも激しくなった場面では、外部の支援者が一部の住民の声を基によかれと思ってやっていることが、実際は多くの住民の方々にとって復興の妨げとなってしまうことも起こってきました。こうした経験をふまえ、住民の方々が自分で大事だと思っていることを表現できる

仕組みが重要と考えています。特に東日本大震災の復興政策においては、住民が地域の復興について意見を述べられる体制をつくろうとする動きはあったものの、それを上手く仕組み化したり運用したりするためのサポートが弱かったと私は感じています。津波被災地でさえそうした部分でのサポートが弱いのであれば、原発事故の場合はさらに仕組みをつくるのは難しかったと思います。浪江町の場合、ほとんどすべての方が町外にバラバラに避難していくことを経験されており、自分たちで大事にしていることが何なのかを集合化して表現したり、表現するための仕組みをつくったりすることはもともと困難であるところに、国の事業などが入ってくることとなった。そうしたときにこそ、当事者の声をどのように表現し発信していくかを考えていくことが大事になってくると考えています。最後に、取り組みの一例を挙げさせていただきます。大槌町では、町内会の方々が中心となって、「地域アーカイブ活動」を行っています。震災前、この地域はどのような地域だったのかということと、災害から現在までにこの地域でどういうことがあったのかということを、自分たち自身も後世の地域の人々も振り返ることができるよう、写真や映像、文書、証言記録などを収集整理し、活用もしていくことを地域主体で行っています。この活動には、住民の方々だけでなく地域外の方々にも、地域のことを理解してもらいやすくするための仕組みづくりという側面もあります、東日本大震災では、震災後にこうした仕組みが被災した各地で作られることが多かったと思いますが、近年は「事前復興」も重要とされています。災害が起こる前からこのような仕組みを整えておくことも重要ではないかと、私は考えています。

板倉：「事前復興」というのは、こういうことがあったらこういうふうにしようとあらかじめ計画しておくということですか。

野坂：事後の災害復興では、災害が起こって地域の人々が混乱している間に多くのことが決まっていってしまうということが多いです。事前復興では、そのように混乱している中であっても少しでも落ち着いて議論できるよう、もし災害が起こった場合どのように地域が復興していくのかを事前に調べ地域で話し合っておくことが重要となります。例えば、どのような生活再建やまちづくりの支援制度があるのか、各支援制度をどうつなげたら良いかなどを事前に地域の皆で、場合によっては地域外の弁護士さんなど専門家の助けも借りながら考えておく方法があります。ただ、そうした話し合いをする前段階として、そもそもその地域内において復興を考える上で何を大事にしたいのかという大前提を、ある程度住民同士で共有できる仕組みをつくっておく必要があると思います。多くの地域内外の人々が関わって始めやすい仕組みづくりの方法の１つとして、「地域アーカイブ活動」はあると私は考えます。

板倉：それは地域だけではなく、県、国でも必要だと思いますね。（2:50:15）今やっている岩手、宮城の復興も国主導なんですよね。これだけ予算組んだのだから進めろと、地元の人たちの思惑とかいうものを無視してどんどん進めていくじゃないですか。そこにゼネコンとかいろいろなものが入ってきてお金も入ってきますよね。そして造ってさっと消えていく。それは地元のための復興ではなくて、あくまでも国の都合、利権という言葉が岩手でも宮城でも出てきますけども、そういうものが見え隠れしてしまうのです。予算は必要なものを設定してから付けるのではなくて、これだけの予算を付けたから何をやるかを決めるという形です。その辺を変えていかないと、国民と住民とかの復興にはたどり着けないと思うんです。そういう意味では宮城、岩手、福島、全部同じだと思うんです。今一番わかりやすいのが「イノベーション・コースト構想」なんですよ。

野坂：東日本大震災の被害は非常に甚大で被災地の範囲も広かったので、復興事業を進める上で国が主導することになったのはまず大前提としてあるのだと思います。こうした状況は、2004 年に発生した中越地震など比較的被災地の範囲が限られていた既存の災害事例とは大きく異なると言えます。ただ、中越地震の時点で高齢社会や人口減少社会に対応しつつ、現

場の声を大事にする新しい復興のあり方が模索されていたのですが、東日本大震災後に一気に時代が引き戻されてしまった感覚が社会科学系の研究者内であるのも確かです。

板倉：野坂さんたちから国に提言してください。

野坂：どこまで聞き入れられるかは分かりませんが、発信はし続けたいと思います。

原田：今日の新聞に、「浪江、飯館地区の除染は終了しました」と国が言っているという記事が載っています。これから除染作業員の方は大幅に減ってくると思います。そういう方を対象にした飲食店が浪江には数多くありますが、また相当の打撃になるのではないかと思うんです。これから人的支援では、これからは避難困難区域での除染だけにとどまって、避難指示解除準備区域、居住制限区域の二つの地区の除染は終わりましたということを言っているわけです。そういう意味でどんどん変わっていくと思います。私どもが国の政策の大きな流れの中でどうしていったらよいのかは難しいのですけれども、自分は少なくとも担当している組織の方の手の及ばない方向へ目を向けていかなければならないと思います。うちの家内も民生委員をやっていてかなり行政の立場ではできないことまでやっていたものですから、制度の枠内ではどうしても踏み込めないものがあって、行政が入れないお年寄りの世話をやっているのです。そういう家内を見ていると、あとは思いやりとかそういうものをもって地域の中で私たちができることをやっていくしかないのかと思うのです。もう町とか県、国からの支持は得られないと思います。そのような気がしてなりません。

板倉：小林茂さんという方から全員にお話をしたいということで、チャットが入っています。

小林：小林です。「イノベーション・コースト構想」に関して、チャットに貼り付けたものを読んでいただければと思いますが、原発誘致当時の木村守江知事が 55 年前に「双葉原子力地区の開発ビジョン」という調査を行っています。1966 年に調査を開始して 2 年後の 1968 年 3 月に報告書がまとまっています。その報告書には、原発を基軸として、核燃料サイクル、すなわち核燃料の再処理工場とその関連施設（核分裂生成物質を用いたラジオアイソトープ製造工場、燃料加工工場、食品照射工場などが挙げられている）やアルミニウム製錬工場に代表される電力多消費型産業を貼り付けるという構想が描かれているんです。
しかし、この報告書は、表題に込められた〝双葉地区の開発〟という木村守江知事の思惑とは裏腹に、原発関連産業及び多種多様な産業の実現可能性について非常に厳しい見方が示されています。報告書は「原子力発電所の立地は、現時点で孤立的であり、また、自己完結的であり」とし、要するに原子力モノカルチャー（単一産業への依存体系）で行くのが適切としか書いてありません。
ところがこの報告書がまとまった 1968 年 3 月の半年後、9 月 4 日に「福島民報」が一面トップで、このビジョンを双葉地区の明るい未来を約束するものとして大々的に取り上げております。
そこでは、双葉地区は原子力産業に最適であるという横凸版見出しが取られていて、縦見出しで「開発ビジョンまとまる」として、まず核燃料再処理工場をつくる、それから関連諸工場の誘致も、と、そしていわき市を国際研究都市にしようというビジョンが描かれています。取材・執筆した記者が、報告書を精読していたなら、このようには書けない・書きようがありません。にもかかわらず、文字通り玉虫色の内容に仕立て上げられているのです。
それから半世紀余り経った今、浜通り浪江も含めた双葉郡の「イノベーション・コースト構想」というのは 1968 年の「双葉原子力地区の開発ビジョン」で描かれたことを震災・原発事故に乗じ甦らせている、そのような感じがするのです。
木村守江知事時代には、原発単一構造・モノカルチャー的な、多様な産業を排除するような

開発しかできなかったものが、50 年以上を経てしかも原発事故という大災害を奇貨として、絶好のチャンスだと、復興のため、という抗いがたいブルドーザー的な力で、今浜通りで進められているのではないかと思っています。これは、まだ検証取材もしておりませんので、とりあえず私の仮説です。
でもどうも似ているな、いわき市の「東日本国際大学」が中心になって進めている復興ビジョン（米北西部ワシントン州のハンフォード核施設とその周辺地域をモデルにした復興プラン、いわゆるハンフォード・モデル）とか、あるいは広野町に出来た早稲田大学レジリエンス研究所の出先機関（「ふくしま広野未来創造リサーチセンター」）であるとか、震災・原発事故被災地とりわけ今なお原子力緊急事態下にある福島県・浜通りをターゲットに復興を旗印に進められているこれらの動きが、開発ビジョンと二重写しになるところが多いのです。非常に既視感があるんです。そのことは、今福島の地元雑誌（政経東北）に、1970 年の 6 月と 8 月に発表された、「日本原子力産業会議」の調査報告の検証記事を書いておりますが、福島県が描いた「双葉原子力地区」というバラ色の夢がどういう形で頓挫していくのかということも含めて、われわれ双葉町、大熊町、浪江町等が、その中でいかに翻弄されてきたのかということを、過去を振り返っているだけではなくて、その中で何が起きたのかということを再構成してみたいと思っているところです。

板倉：ありがとうございます。実は僕も同じことを推測で考えていたんです。言葉は悪いですけど、双葉郡を金の生る木と見立てて原発政策があった、原発が、誘致された当時そういうことがあったかどうかは別として、その大きな流れの中にいま「イノベーション・コースト構想」があると思うのです。原発政策に利権がありました。この利権が事故によって無くなってしまった。その利権を継続させたい。そのためにでっち上げたのが「イノベーション・コースト構想」だったと思うのです。本当にあのような巨大プロジェクトが必要であれば、ああいう危険なところで巨大なプロジェクトはやりません。福島第一原発が再度事故を起こしたら、また避難しなくてはいけないのです。そういうことを考えたら、あそこにあのような巨大プロジェクトを建設しようという気持ちにはならないはずです。あそこでやる理由をよく考えてみると、行きつくところ原発事業の延長線だと思うのです。

小林：危険な場所と監督がおっしゃいました。去年開館した双葉町の伝承館（東日本大震災・原子力災害伝承館）も、津波ハザードマップをご覧になるとわかりますが、仮にまた大きな津波が来た場合、あの地域も津波に洗われる。
しかも避難指示解除区域であった双葉町と浪江町にまたがる両竹地区というところは、なかでも大津波が再来する可能性があるとされ、海岸線の防災・復興のために必要な臨時拠点でもあるので、2020 年 3 月に避難指示が解除されたけれども人は戻れませんということで、誰も戻ってきていないのです。
浪江町の新しい津波ハザードマップも、皆さんご覧になっていると思いますけれども、仮に千年に一度の津波といっていますけどもそれがいつ来るかはわかりません。その津波が起きたときにいま「イノベーション・コースト構想」で進んでいる大規模なプロジェクトの施設立地場所のいくつかは津波襲来エリアに入っています。
そのような場所で復興マネーをあてにして大きなプロジェクトを進めようとしています。福島原子力発電所は 14m、15m の津波があるといわれていたにもかかわらず、あるいはあの原発を建てるときに、この地域には 400 年に一度しか大きな地震は来ないという、自分に都合のいい理屈によって立地したわけです。
過去の災害履歴があるにもかかわらず、それを無視して見ないようにしていたところに地震と津波が来てしまった。同じことが、「イノベーション・コースト構想」の中で、都合の悪いものは見ないということで進められているように私は感じています。これから起こりうるであろう災害から目を逸らすことは、10 年前にあの悲惨な体験をしたわれわれとしては、やはり許容できないと思います。

【追記】
①この日お話しした「双葉原子力地区の開発ビジョン」報告書を中心に原発誘致の経緯や地元メディア報道のあり様を交えた拙文を提稿、「政経東北」10 月号に［木村守江知事（当時）が果たした役割／幻の双葉原子力センター構想］の表題で掲載されました。
②「双葉原子力地区の開発ビジョン」報告書は現在、福島大学の研究者が研究資料として用いた複製版が福島県立図書館に寄贈され、閲覧・帯出に供されています。しかし、福島県が行った調査であるにもかかわらず、原本は未だ所在不明で、複製版に巡り合うことがなければ、その存在さえも闇に葬られたままだったのです。このため一縷の可能性を求め、原本の所在を確認すべく、調査当事者である福島県に情報開示請求を行いましたが、結果は予想通り「不存在」(「開示請求に係る公文書については、取得・作成していないか、または取得・作成した可能性があるとしても、5 年保存の公文書であるため、同時期に廃棄しており、保有していません。」）という通知（10 月 5 日付け）でした。当時の政策・意思決定の記録を残す行為は、後世に教訓を伝え、検証・批評に供する上で重要であるにもかかわらず、公文書保存ルールを一律に適用し廃棄した――とする回答には不誠実・不明朗なものを感じざるを得ません。

原田：最後に小林さんに一言、実は 1860 年代の双葉郡の原子力開発プロジェクトは、茨城県の東海村の開発と時期を同じくしているのですね。それは乾康代先生の『原発都市』という幻冬舎の新書に書かれています。まさにあの当時、あちこちに原発をつくるときの指針みたいのがあって、それで全国ずーっとやっているのかと思って今びっくり致しました。ありがとうございました

板倉：ありがとうございます。小林さんのご紹介をしてもよろしいでしょうか。じつは小林さんの書かれた雑誌記事を昨日読んだんです。小林さんは読売新聞の福島支局長をされた方で、そのあと水戸支局長として、長年にわたって新聞記者という立場から取材してこられた方です。今日はその立場からご発言いただきました。
伊藤：向井雪子さんより、チャットが入っています。これを読み上げさせていただきます。「チェルノブイリの子どもたちを長年支援してきた(現在も)経験から言いますと、浪江町に若い人たちが戻ることができるのは、はるかに先のことだと思います。ですので、町民コミュニティ構想が流れたのは痛いですね。酒井地区長さんが個人的に観測した放射能の値をもっと、皆さん、考えたほうがいいと思います。時間がないので、今日はここまでとします。現在、沖縄・球美の里の活動で福島の子ども達を沖縄・久米島に保養に送り出す活動をしていますが、いまは休止中です。向井雪子」

長田：議論は、さらに新たな段階に入ってきていると思うのですが、それについては改めて別の機会を設けて、議論を続けていければと思います。本日の議論は「町外コミュニティ」というアイディアが町民の間でつくられながら、それがいかに実現できずに終わってしまったのかという経緯をわれわれとしてしっかり理解したということを、本日の成果としたいと思います。それを前提として、われわれは浪江町民として登録している多くの方々が、2 点居住という形で行き来されており、浪江への思いを強く持ち続けておられる。しかしどんどん時間がたってしまったので、もう仕方がないとあきらめてしまわれるということを、われわれは見過ごすというわけにはいかないような気がします。そのことを踏まえてできるだけ、浪江の外部に避難されている人たちの状況も含めて、いろいろな情報をお伝えできるような機会をつくっていきたいと思います。それでは、袖井先生から最後に一言お願いできるでしょうか。

袖井：本日はどうもありがとうございました。私は大変ショックを受けて、またこれで新しい課題が出てきたなと思うのです。といいますのも、これまではどちらかというと避難して

きている方々の心情に寄り添うというかなりミクロな視点からアプローチしていたんですね。でも今日の皆さんたちのお話を聞いていたときに、何かもう巨大な力によってコントロールされているという恐ろしさを感じました。もう少し私たちのスタンスもマクロな視点でみていかなくてはいけないのではないか、ということをしみじみ思いました。小林さんのお話はすごいショックだったのですが、ご存知のように読売というのは原発推進派ですよね。正力松太郎さんが旗降って、でもその日本がこんなになってしまった。ところが読売新聞の記者がこんなことをやっていらっしゃってすごいと感動いたしました。ぜひ次回のシンポジウムなんかにもご参加いただいて発言していただきたいのですが、監督も何べんもおっしゃいましたが「イノベーション・コースト構想」など、何か巨大な力によって私たちの生活が無茶苦茶にされているという、これオリンピックも同じだと思うんですね。根は同じです。その中でなぜ日本人というのは、唯々諾々と付いて行ってしまうんだろうかと思うと、ものすごく悲しいですね。第 2 次世界大戦もそうでした。そう考えると、いま踏みとどまらなければ奈落の底に行ってしまうのではないか、というものすごい恐ろしさを感じます。今日は、そういう意味で次の課題をお示しいただいて、本当にありがとうございました。今後とも続けていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

長田：それでは時間になりましたので、ご参加いただいた皆様、原田さん、伊藤さん、コメンテーターの野坂さん、松村さん、そして板倉監督に、改めてお礼を申し上げます。板倉監督には、これからもドキュメンタリー撮影を継続していただきたいと思います。本日は、長時間にわたりましたが、ご参会いただき本当にありがとうございました。

終了後、以下のご意見が伊藤まりさんから寄せられましたので、記録に残しておきます。

「今回の『町外コミュニティ』と『イノベーション・コースト構想』は、まさに現在の新型コロナの状況とよく似ており、「人」と「経済」の構図です。浪江住民の絆か、経済復興か。人の命か、東京オリンピックか…。本当はもう少しその辺の所をお話ししたかったです。」

以下、チャットの内容から掲載すべきと思われるものを記録しておきます。

15:24:19 開始 博樹 坂口 に 全員:

板倉監督へ

今日はみなさんのいいお話を有り難うございます。

16:43:47 開始 小林茂 に 全員:

福島市在住（高校時代まで双葉町ですごしました）の小林茂と申します。以下、問題提起の拙文を貼り付けます。

16:43:56 開始 小林茂 に 全員:

被災地再生「イノベ構想」と 53 年前の「双葉原子力センター構想」

〇問題提起として

原発を中核とした双葉浜通り地区開発を構想し、知事木村守江の肝煎りで 1966（昭和 41）年 10 月調査着手、1968（昭和 43）年 3 月まとまった「双葉原子力地区の開発ビジョン」があります。

その中に盛り込まれた要素（核燃料再処理工場とその関連工場等々＝ただし、報告書では「原子力発電以外の大工場の立地は望みえないので、原発による電力供給に特化し開発してはどうか」とし、知事・県庁の思惑とは大きく隔たった提言内容となっています）が、原発事故を契機として姿を変えて、あたかも災害便乗型の「イノベ構想」として蘇った印象を抱いています。（論証・検証未了につき仮説私見の域を出ていません）

16:50:25 開始 向井　雪子 に 全員:

チェルノブイリの子どもたちを長年支援してきた(現在も)経験から言いますと、浪江町に若い人たちが戻ることができるのは、はるかに先のことだと思います。ですので、町民

コミュニティ構想が流れたのは痛いですね。酒井地区長さんが個人的に観測した放射能の値をもっと、皆さん、考えたほうがいいと思います。時間がないので、今日はここまでとします。現在、沖縄・球美の里の活動で福島の子ども達を沖縄・久米島に保養に送り出す活動をしていますが、いまは休止中です。向井雪子

（了）